

原 著

# 気質特徴に適合した親子ふれあい遊び体験が養育者の 育児不安及び育児自己効力感に及ぼす効果 —対面あるいはオンラインによる実施形式の違いの検討—

武井祐子\*<sup>1</sup> 門田昌子\*<sup>1</sup> 奥富庸一\*<sup>2</sup> 竹内いつ子\*<sup>1</sup>  
岩藤百香\*<sup>3</sup> 岡野維新\*<sup>1</sup> 寺崎正治\*<sup>1</sup>

## 要 約

気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを、対面実施形式、オンライン実施形式、対面実施形式を参考にオンライン実施形式に修正を加えたオンライン修正実施形式で、養育者の育児不安と育児自己効力感にどのような効果の違いがあるのかを明らかにし、オンライン実施での子どもの気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムの有効性を検証した。対面実施形式10組（対面群）、オンライン実施形式18組（オンライン群）、オンライン修正実施形式10組（オンライン修正実施群）の質問紙の回答を分析した結果、実施形式によらず、育児に対する漠然とした不安は下がることが明らかとなった。一方、対面実施群のみで、子どもへの忌避感情といった育児不安が下がり、育児自己効力感が上がることが明らかとなった。気質特徴に適合した親子ふれあい遊びは、オンライン実施形式でも対面実施と同様に、養育者に対して効果的な育児支援プログラムではあるが、対面と同様に養育者の育児自己効力感を高めるようなオンラインによる育児支援のプログラムを提供するためには、さらに内容についての検討が必要であると考えられる。

## 1. 緒言

乳幼児期において扱いにくい気質特徴を示す子どもであった場合、母親の育児不安は高まる<sup>1)</sup>。よって、養育者が子どもの気質特徴を理解した上で、気質特徴に合った適切な対応ができることは、乳幼児期の養育者の育児不安を低減させ、健全な愛着形成を促進させるだけでなく、子どもの健全な発達のためにも重要であると考えられる。武井ら<sup>2)</sup>は、子育てをめぐる不安（育児不安）やストレス（育児ストレス）に影響を与える要因として子どもの気質特徴に着目し、養育者の育児不安を低減するためには、気質特徴に合った育児行動ができるという、育児自己効力感を高めることが重要であることを明らかにした<sup>3)</sup>。さらに、この知見を実証的に検証するため、気質特徴に適合した12種類のベビーマッサージプログラムを開発し<sup>4)</sup>、養育者が育児をする上で、

肯定的な効果をもたらすことを明らかにした<sup>5-7)</sup>。しかし、養育者を支援する方法として、気質特徴に適合したベビーマッサージプログラムの提供は効果的であることは明らかとなった一方で、子どもの活動レベルが高まる1歳後半以降になると、プログラム自体を実施することが難しいことも指摘されていた。そこで、従来の親子ふれあい遊び<sup>8,9)</sup>を参考に、1歳半以降においても継続的に実施可能で、より日常生活に組み入れやすいプログラムとして、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムを開発した<sup>10)</sup>。

子どもの気質特徴を養育者にフィードバックすると、従来の親子ふれあい遊びを体験するだけでも、育児のなかでの子どもへの新たな気づきにつながり、子どもへの関わりの重要性を実感させ、育児による時間の拘束感や負担感が低下するなど育児不安

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

\*2 立正大学 社会福祉学部 子ども教育福祉学科

\*3 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

（連絡先）武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

に対して一定の効果が認められる<sup>11)</sup>。子どもの気質特徴をフィードバック後に気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを体験すると、従来の親子ふれあい遊びの体験後に確認される効果に加えて子どもや養育者に対する忌避感情が低下するなどの効果も指摘されている<sup>12)</sup>。また、従来の親子ふれあい遊びを日常の中で取り入れるようになったと回答する養育者は、「2日に1回程度」と「1週間に1回程度」を合わせて42.9%と半数以下であったのに対し、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びは70%近くであったことが報告されている<sup>12)</sup>。以上のことから、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラム<sup>10)</sup>は、従来の親子ふれあい遊び<sup>8,9)</sup>と比較して、日常生活に取り入れられる可能性が高く、養育者に対して効果的な育児支援プログラムの1つになると考えられる。このプログラムは養育者と子どもとスタッフが、1つの会場に集まり、対面で直接的に指導が実施される対面実施形式でのプログラムとして提案されている。

2020年のはじめから日本でもひろがりをはじめた新型コロナウイルス感染症によって、現在までの子育て支援のあり方は、大きな影響を受けている。例えば、日本独自のシステムであり、市町村ごとに実施され、日本のどの地域でも同じシステムで利用できる乳幼児健康診査も影響を受けている。乳幼児健康診査は、子どもの同年齢集団との初めての出会いの場となることが多く、養育者にとって、育児をする上での気づきが得られる重要な機会であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、一時的に実施が中止や延期、人数を制限していることが全国的に報告されている。また、日中の保育に欠ける子どもの保育を行い、健全な心身の発達をを図ることを目的とする児童福祉施設である保育所は休園となり、養育者は仕事を休まざるをえず、自宅で子どもと過ごすことにより、今後の状況に対する先の見えない不安とストレスを訴えていることも報告されている。さらに、子育てをはじめたばかりの養育者が育児上の日々の不安を相談し、育児支援を得ることができる地域の子育て支援センターや児童館なども、休園や利用中止が一定期間続き、養育者が適切な子育て支援のサービスを身近で得ることができないことが生じている。森野ら<sup>13)</sup>は、コロナ禍で養育者は、支援センターなどの施設や子どもが集まる場、地域の催しなどに行くことへの不安があること、不安による自粛で遊びの場や人とのかかわりが限定されることが、養育者の育児上の悩みとしてあがっていることを報告している。さらに、コロナ禍においては、このような不安に配慮した遊びの場の提供、その中でのひととのかかわりを意識した子育て・子

育て支援がいつもにも増して求められると指摘している<sup>13)</sup>。また、子育て支援の現場や施策がコロナ禍によって大きな影響を受けてきている状況について、瀬々倉と清水<sup>14)</sup>は、親子の閉塞感や育児不安が深刻化する要因は限りがないことを指摘し、情報通信技術（Information and Communication Technology 以下、ICT）を活用したハイブリッド型の子育て支援の取り組みは、多様な家庭に対応した遊びを提供できること、きょうだいや父親、祖父母の参加を可能とすること、遠方に住む家族の再会の場となるなどの利点があると報告している。以上のことから、現在続くコロナ禍での状況と同様の事態が、今後も起こりうることを想定し、ICTを活用した子育て支援プログラムの開発および提供が可能となるよう、検討を進めていくことは必要であると考えられる。

武井ら<sup>15)</sup>は、コロナ禍で対面実施形式での気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラム<sup>10)</sup>などの育児支援プログラムの実施が困難であることを考慮して、これまで対面で実施してきた気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムをオンライン実施形式で実施し、養育者の育児不安および育児自己効力感への効果を検討した。その結果、対面実施形式での実施と異なり、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びの体験前と体験1カ月後で養育者の育児不安および育児自己効力感に差は認められず、対面実施形式のプログラムのような効果が期待できないこと、ICTを活用した子育て支援の方法については、より詳細な検討を進めていくことが必要であると指摘している。ICTを活用した子育て支援の方法を提供するためには、対面での実施内容を取り入れながらも、より丁寧な対応の工夫を試みる必要があると考えられる。

そこで、対面実施形式での実施と同様に養育者が確実に遊びを体験できるよう補助者によるサポートや講師による個別のフィードバックを実施するなど、オンライン実施形式に修正を加えたオンライン修正実施形式で気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムを実施した。本研究では、対面実施形式、オンライン実施形式、オンライン修正実施形式という3つの実施形式による違いによって、養育者の育児不安と育児自己効力感にどのような効果の違いがあるのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 被調査者

A市にある子育て支援センターや保育園に貼られた、あるいは配布されたチラシを見て応募し、研究参加に同意した養育者とその子ども41組であった。

分析を実施したのは、事前アンケート調査への回答、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムへの参加、1カ月後に送付する事後アンケート調査への回答の全ての調査に協力した38組であった。参加申込み時の母親の平均年齢は35.0歳 (SD=4.90)、子どもの平均月齢は35.3カ月 (SD=10.43) であり、男児16名、女児22名であった。対象者は、実施した年度によって3つの群に分けられ、分析を実施したのは全ての調査に協力した対象者であった。2018年度に実施した対面群10組 (子どもの平均月齢は36.5カ月 (SD=15.09)、男児4名、女児6名)、2020年度に実施したオンライン実施群18組 (子どもの平均月齢は35.1カ月 (SD=9.98)、男児10名、女児8名)、2021年度に実施したオンライン修正実施群10組 (子どもの平均月齢は34.6カ月 (SD=5.42)、男児2名、女児8名) であった。

## 2.2 調査内容

### 2.2.1 幼児気質質問紙

武井ら<sup>16)</sup>によって作成された幼児気質質問紙を使用した。質問項目は、子どもの最近の状態 (この1カ月) についての回答を求めるものであり、否定的感情反応尺度 (9項目)、神経質尺度 (10項目)、順応性尺度 (6項目)、外向性尺度 (8項目)、規則性尺度 (7項目)、注意の転導性尺度 (7項目) の6尺度47項目で構成されていた。各尺度の回答は、「1:全くみられない」「2:ほとんどみられない」「3:時々みられる」「4:いつもみられる」の4段階で評定された。なお、各尺度の評定が高いほどその気質特徴を強く表わす子どもであることを示すが、順応性尺度においては、得点が高いほど順応性の気質特徴を強く表わさないことを示していた。

### 2.2.2 育児不安質問紙

手島と原口<sup>17)</sup>が作成した育児不安質問紙を使用した。この質問紙は、回答者の子育てに対する感じ方、実際に子育てをしてどのように感じているか回答を求めるものであり、中核的育児不安尺度 (10項目)、育児感情尺度 (8項目)、育児時間尺度 (6項目) の3尺度24項目で構成されていた。回答形式は、「1:全くあてはまらない」「2:あまりあてはまらない」「3:少しあてはまる」「4:非常にあてはまる」の4段階評定であった。尺度得点が高いほど育児不安が高いことを示していた。

### 2.2.3 育児自己効力感質問紙

井元ら<sup>18)</sup>が作成した育児行動に対する自己効力感質問紙より項目を選定して用いた。具体的には、育児不安尺度や育児満足尺度との間に強い相関関係が報告されている<sup>18)</sup>「接し方」(6項目)と「褒め方・叱り方」(3項目)のカテゴリーに含まれる9項目を

用いた。回答形式は、「1:全くできないと思う」「2:あまりできないと思う」「3:少しできると思う」「4:確実にできると思う」の4段階評定であった。得点が高いほど育児自己効力感が高いことを示していた。

## 2.3 調査時期および手続き

気質特徴に適合した親子ふれあい遊び教室の実施形式の違いによって、対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群に分けて実施された。対面実施群は2018年7月、オンライン実施群は2021年1月、オンライン修正実施群は2021年12月に実施した。

調査を実施する子育て支援センターやA市内の複数の保育園の責任者に、調査について説明し、署名で同意を得た後、同意を得られた施設に参加募集のチラシを貼るとともに必要に応じてそのチラシの配布も行い、参加募集を行った。参加募集のチラシでは、調査対象となる子どもの年齢が2歳から4歳であること、気質質問紙や育児に関わる質問紙などへの回答を求めること、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを実施するプログラムへの参加は、母親か父親、どちらかの養育者の参加が必要であること、調査の内容および調査の流れ、調査日時、調査場所、申込み方法などを説明した。参加申込みのあった対象者に研究協力のお願ひ、同意書および同意撤回書、事前アンケートとして、幼児気質質問紙、育児不安質問紙、育児自己効力感質問紙、返信用封筒を郵送し、同意書に記入および3つの質問紙に回答後、返送を求めた。参加申込みの際にきょうだいの参加の可否について尋ねられた場合は、きょうだいが調査対象の年齢の場合には親子ふれあい遊びを実施できる複数の養育者の参加を勧めた。きょうだいが調査対象の年齢でない場合で、自宅ではなく会場で参加する場合には、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを実施している間は、会場にいるスタッフがきょうだいに対応することが可能であることを伝えた。

対面実施群は、参加者とスタッフは1つの会場に集まり、全てのプログラム内容を対面で実施した。オンライン実施群は、参加者は、3か所の子育て支援センターあるいは自宅のいずれかでの参加を選択し、各所と親子ふれあいプログラム<sup>9)</sup>を実践してきた幼少年体育指導士の所属大学 (以下、A大学) をインターネットで接続し、全てのプログラムを実施した。スタッフはA大学が3か所の子育て支援センターのいずれかの場所に対応した。オンライン修正実施群では、参加者は1か所の子育て支援センターあるいは自宅のいずれかでの参加を選択し、各所とA大学をインターネットで接続し、全てのプログラムを実施した。スタッフは子育て支援センターで対応した。

表1 気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムの実施場所と手続き

	 対面実施群 (n=10)	 オンライン実施群 (n=18)	 オンライン修正実施群 (n=10)
実施場所	会場	会場（3か所）あるいは自宅	会場（1か所）あるいは自宅
気質特徴の説明の方法	対面での説明	1か所の会場は対面での説明 他の会場あるいは自宅は オンラインでの説明	会場は対面での説明 自宅はオンラインでの説明
子どもの気質特徴の フィードバックの方法	書面と口頭で個別に説明	書面のみで結果を説明	書面と口頭で個別に説明
気質特徴に適合した 親子ふれあい遊び の説明の方法	対面での説明	オンラインと動画で説明	オンラインと動画で説明 会場でスタッフが補足説明
気質特徴に適合した 親子ふれあい遊び の指導の方法	対面での指導	スタッフは参加者の 遊びの実施を見守る	スタッフは参加者に声かけと 遊びの実施を個別にサポート

気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムのなかで、気質特徴の説明および参加者の子どもの気質特徴の説明、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びについては、表1に示すように実施した。

気質特徴の説明については、対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群の3つの群の全てのプログラムで、以下のように説明した。子どもの気質特徴とは、子どもの性格（気質）のようなものであること、生まれてから1～2年の間には比較的变化が少なくとされているが時に変化する可能性もあること、気質特徴は6つの内容で調べていること、アンケート結果は1点～4点の間で評価されること、気質特徴は「良い・悪い」はなく、あくまでも子どもの特徴であること、アンケートの得点が高かったり、低かったりしても、問題があるということではないことを養育者に口頭で説明した。さらに6つの気質特徴が日常生活のなかでどのような行動として表現されるのかを具体的に口頭で説明を行った。以上の口頭による説明を、対面実施群は対面で、オンライン実施群とオンライン修正実施群は対面あるいはオンラインで実施した。

その後、対面実施群では、養育者が回答した幼児気質質問紙の結果に基づき、子どもの6つの気質特徴についての具体的な結果を、書面と口頭で個別にフィードバックした。オンライン実施群とオンライン修正実施群では、養育者が回答した幼児気質質問紙の結果に基づき、子どもの6つの気質特徴につ

いての具体的な結果について記載したフィードバック書面を、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びの会の当日までに自宅に送付した。オンライン実施群およびオンライン修正実施群では、プログラムのなかで、参加者にはあらかじめ送付された子どもの6つの気質特徴についての具体的な結果について記載したフィードバック書面を手元に用意するよう求めた。子育て支援センターの1か所での参加者には、対面で書面の見方を説明した。自宅参加者やその他の子育て支援センターでの参加者には、オンラインで書面の見方を説明した。説明後、全ての参加者にフィードバック書面をよく確認するよう求めた。

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群の全ての群で、親子ふれあいプログラム<sup>9)</sup>を実践してきた幼少年体育指導士の指導のもと、40分程度、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを実施した。対面実施群では、参加者および気質特徴に適合した親子ふれあい遊びについて指導する幼少年体育指導士を含む全てのスタッフは同じ会場で参加し、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを実施した。参加者は、幼少年体育指導士から、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びについて対面で直接に説明と指導を受け、気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを体験した。遊びの説明の際には、幼少年体育指導士が参加者の子どもに実際に直接関わり、養育者に子どもとの遊びの方法を具体的に説明し、養育者と子どもが遊びを体験できるように状況を確認し

ながら進めた。オンライン実施群では、参加者は、3か所の子育て支援センターと自宅のいずれかで参加し、各所とA大学とインターネットで接続し、参加者はオンラインで、気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びについて、幼少年体育指導士から説明と指導を受け、気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びを体験した。幼少年体育指導士以外のスタッフは、親子ふれあひ遊びの指導自体は実施せず、参加した親子が安全に遊びを体験できるように各会場で様子を見守った。オンライン修正実施群では、A大学とインターネットで接続し、参加者は1か所の子育て支援センターおよび自宅のいずれかで参加し、参加者はオンラインで、気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びについて、幼少年体育指導士から説明と指導を受け、気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びを体験した。親子と同じ会場にいる複数のスタッフが、親子の参加の様子にあわせて気質特徴の説明や気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びの内容について説明を口頭で補足し、親子がスムーズに遊びを体験できるように声かけをするとともに遊びの実施をサポートした。

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群の全ての群において、各気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びの内容をいくつか紹介した。また、親子ふれあひ体操<sup>8)</sup>を中心とした親子ふれあひプログラム<sup>9)</sup>で実施されている従来の親子ふれあひ遊びについての気質特徴に適合した遊び方の工夫についても紹介し、それらの遊びを親子が体験できるように進めた。例えば、気質特徴に適合した親子ふれあひ遊びの内容として、外向性の気質特徴が高いタイプの子どもには、メリーゴーランドなどの逆さ感覚を養う遊びを紹介した。メリーゴーランドは子どもの背中を支えて背面に倒し、ゆっくり横にぶらぶら振ったり、くると1回転させるなど体全体を使った活発な遊びの内容から構成されていた。外向性の気質特徴が高い子どもは、活発で社交性が高く、少し落ち着きがないタイプであり、走ったり、大人の背中や足に登る等、運動欲求を十分に満たすような、ダイナミックで身体を大きく動かす遊びを好む特徴があるためである。また、気質特徴に適合した遊び方の工夫については、同じ内容の遊びを実施する際の導入の工夫について紹介した。例えば、順応性の気質特徴が高いタイプの子どもは、おとなしく、初めての場所や遊びでは少し緊張してしまうタイプであるため、からだを持ち上げる遊びについて行う時は、触れ合うことを大切にしながらゆっくりと行うこと、たかいたかいではなく、ひくいひくいからはじめるようにと伝えた。さらに、子どもの様子に合わせて

時間をかけて行うことで、どのような遊びも取り組みやすくなると伝えた。親子ふれあひ遊び中は玩具や遊具を使用することはなく、スキンシップを伴う親子がふれあひ遊びで構成されていた。

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群の全ての群において、プログラムを実施した1カ月後に、事後アンケートとして、参加者に育児不安質問紙、育児自己効力感質問紙、自由記述質問紙への回答、返送を求めた。

## 2.4 分析方法

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群で、子どもの気質特徴の比較のために、1要因の分散分析を行った。また、対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群で、子どもの気質特徴のフィードバックを受け、親子ふれあひ遊び体験前と体験1カ月後（体験後）で育児不安及び育児自己効力感に変化が認められるかを検討するために、混合計画の2要因（対面群・オンライン群・オンライン修正群×体験前・体験後）の分散分析を行った。

## 3. 結果

### 3.1 養育者が認知する子どもの気質特徴

養育者が認知している子どもの気質特徴の6つの下位尺度について、対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群で、子どもの気質特徴に違いがあるのかを検討するために、1要因の分散分析を行った（表2）。

結果、否定的感情尺度のみ、群による有意差が認められた（ $F(2, 35)=3.62, p<.05$ ）。そこで、Tukey法による多重比較を行ったところ、オンライン修正実施群が、対面実施群より、否定的感情反応尺度が有意に高いことが明らかとなった（ $p<.05$ ）。その他の5つの気質特徴の下位尺度には、群による有意な差は認められなかった。

### 3.2 気質特徴に適合した親子ふれあひ遊び体験前後の育児不安及び育児自己効力感の変化

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正実施群の3つの実施形式の違いで、子どもの気質特徴に適合した親子ふれあひ遊び体験前と体験後で育児不安及び育児自己効力感に変化が認められるかを検討するために、混合計画の2要因（対面実施群・オンライン実施群・オンライン修正実施群×体験前・体験後）の分散分析を行った（表3）。結果、育児不安の中核的育児不安については体験の主効果（ $F(1, 35)=8.15, p<.01$ ）、育児感情は交互作用が有意であった（ $F(2, 35)=5.00, p<.05$ ）。そこで、育児感情について単純主効果の検定を行ったところ、対面実施

表2 対面実施群・オンライン実施群・オンライン修正実施群の気質特徴

気質尺度	全体 (n=38)	対面実施群 (n=10)	オンライン 実施群 (n=18)	オンライン 修正実施群 (n=10)	F値	多重比較
	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)	Mean(SD)		
否定的感情反応	2.31(0.52)	1.96(0.56)	2.40(0.52)	2.50(0.35)	3.62*	オンライン修正実施群>対面群
神経質	2.62(0.48)	2.58(0.44)	2.69(0.47)	2.55(0.55)	0.35	
順応性	2.47(0.64)	2.46(0.70)	2.51(0.53)	2.40(0.81)	0.09	
外向性	3.14(0.37)	3.10(0.40)	3.19(0.28)	3.10(0.49)	0.31	
規則性	3.18(0.38)	3.08(0.26)	3.24(0.44)	3.17(0.38)	0.54	
注意の転導性	3.11(0.37)	2.99(0.41)	3.17(0.31)	3.13(0.44)	0.81	

\* $p < .05$ 

表3 対面実施群・オンライン実施群・オンライン修正実施群別の体験前後の育児不安及び育児自己効力感の変化

	対面実施群 (n=10)		オンライン実施群 (n=18)		オンライン修正実施群 (n=10)		体験主 効果 F値	群主 効果 F値	交互 作用 F値
	体験前 Mean(SD)	体験後 Mean(SD)	体験前 Mean(SD)	体験後 Mean(SD)	体験前 Mean(SD)	体験後 Mean(SD)			
育児不安									
中核的育児不安	2.45(0.33)	2.18(0.40)	2.56(0.55)	2.42(0.50)	2.54(0.66)	2.42(0.59)	8.15**	0.46	0.50
育児感情	1.73(0.39)	1.54(0.40)	1.67(0.32)	1.76(0.43)	1.68(0.51)	1.55(0.44)	2.87 <sup>+</sup>	0.28	5.00*
育児時間	3.20(0.38)	3.27(0.52)	2.94(0.33)	2.89(0.40)	2.92(0.60)	2.87(0.58)	0.02	2.34	0.31
育児自己効力感									
接し方	2.73(0.38)	2.93(0.47)	3.00(0.36)	2.86(0.41)	2.78(0.39)	2.75(0.48)	0.02	0.68	2.96 <sup>+</sup>
叱り方・褒め方	3.23(0.45)	3.43(0.39)	3.56(0.23)	3.41(0.31)	3.23(0.39)	3.30(0.33)	0.53	1.88	4.08*

<sup>+</sup> $p < .10$ \* $p < .05$ \*\* $p < .01$ 

群において、有意な体験の主効果が認められた( $F(1, 35)=5.56, p<.05$ )。つまり、対面実施群においては、体験前より体験後の方が有意に育児不安の育児感情が下がることが明らかとなった。また、育児自己効力感の叱り方・褒め方について、交互作用が有意であった( $F(2, 35)=4.08, p<.05$ )。そこで、単純主効果の検定を行ったところ、対面実施群とオンライン実施群において、体験の主効果の有意な傾向が認められた(対面実施群: $F(1, 35)=3.88, p<.10$ , オンライン実施群: $F(1, 35)=3.84, p<.10$ )。つまり、対面実施群においては、体験前より体験後の方が育児自己効力感の叱り方・褒め方が上がる傾向があり、オンライン実施群においては下がる傾向があることが明らかとなった。

#### 4. 考察

対面実施群、オンライン実施群、オンライン修正群において、養育者が認知する子どもの気質特徴を比較したところ、否定的感情反応尺度以外の5つの気質特徴の下位尺度において差は認められなかったが、オンライン修正実施群において、対面実施群よりも否定的感情反応尺度で示される気質特徴、つまり、子どもが“痾癩が激しい”“不機嫌である”といった否定的な感情を激しくあらわす気質特徴を示すことが明らかとなった。この気質特徴は養育者の育児不安との関連が指摘されており、子どもが“痾癩が激しい”“不機嫌である”といった否定的な感

情を激しくあらわす気質特徴を示すほど、母親は“子育てに失敗するのではないかと思うことがある”といった育児自体に対する漠然とした不安を示すことが明らかとなっている<sup>2)</sup>。また、武井ら<sup>19)</sup>は、幼児期の子どもの気質特徴を慣れにくく、臆病でおとなしい気質タイプ、わがままでよく泣く気質タイプ、穏やかで機嫌がよく、生活リズムが安定している気質タイプの3つのタイプに分け、わがままでよく泣く気質タイプの子どもの養育者は、3つのタイプの中で最も育児不安が高く、育児自己効力感が低いこと、子どもがわがままでよく泣く気質タイプの気質特徴を示す場合には、早期に養育者への育児支援が必要だと指摘している。オンライン修正実施群のプログラムの実施は2021年であり、コロナ禍となって2年目が過ぎた頃である。新型コロナウイルス感染症によって、様々な子育て支援施設が予約制、人数制限が設けられるようになることで、親子が気軽に遊びに行ける地域の遊び場所がなくなっている。また気軽に同年齢の親子との交流が難しくなるなど自宅のなかで親子のみで過ごす時間が長くなり、さらに公的な子育て支援が得られない状況にもなっている。そのようななかで、養育者は自身の子どもへの関わりの難しさを感じる気質特徴をより強く認知するようになっていた可能性が考えられる。よって、気質特徴を理解した上での関わり方を助言するなどより積極的な育児支援を提供していくことが必要な状況となっていたと考えられる。

対面実施群, オンライン実施群, オンライン修正実施群の3つの実施形式の違いで, 子どもの気質特徴に適合した親子ふれあい遊び体験前と体験後で育児不安及び育児自己効力感に変化が認められるかを検討したところ, 実施形式によらず, 養育者が子どもの気質特徴を理解し, 気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを体験することは, 養育者の育児自体に対する漠然とした不安を低減させることが明らかとなった。オンライン修正実施群では, 痲癢が激しいといった, いわゆる扱いにくい子どもの気質特徴を, 養育者がより強く認知するようになっているにもかかわらず, 気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを体験することが, 養育者に肯定的な効果があった。これは, コロナ禍のような制限された環境の中で育児をする際に, オンライン形式などの制限された実施形式であっても, 気質特徴に適合した親子ふれあい遊びを養育者が体験することが, 幼児期の養育者に対する育児支援の方法として効果的であると考えられる。しかしその一方で, 育児や子どもに対する忌避感情や育児自己効力感に対して, 肯定的な効果が認められたのは, 対面実施形式のみであった。この点においては, オンライン実施形式, 対面実施形式の方法の一部を取り入れたオンライン修正実施形

式であっても, 対面実施形式ほどには, 養育者にとって, 効果が高い育児支援プログラムとはいえ, 対面実施形式と同レベルの効果を求めていくためには, 対面実施形式のどのような側面が効果をもたらすのか, さらに検討を進めていく必要があると考えられる。

一方, 森野ら<sup>13)</sup>は, 子育て・子育て支援が目指すものは何かという原点に立ち戻り, 対面保育と全く同じことをする必要性ではなく, オンライン保育でも対面保育と同じ目標の価値を目指すには, どのような活動や援助を大事にすると良いか考えるという努力, 対面とオンラインのどちらが良いのかという二極化議論ではなく, それぞれの長所をどのように扱っていくと目指す方へ向かうことになるのかということを検討する必要性を指摘している。今後, 対面実施形式とオンライン実施形式による気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムの養育者への効果の違いについても理解しながら, コロナ禍において実施可能な, オンライン実施形式, ICTを活用した子どもの気質特徴に適合した親子ふれあい遊びプログラムの実施方法と内容について, さらに検討していくことが必要だと考えられる。

#### 倫理的配慮

本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を受けた(承認番号17-050)。なお, 研究協力のお願いの文書には, 得られたデータは厳重に保管し, 研究以外の目的で使用しないこと, 個人が特定されることはないことを明記した。

#### 謝 辞

本研究を実施するにあたって, 調査にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。本研究は, JSPS 科研費 JP15K01928の助成を受けて実施した。

#### 文 献

- 1) 水野里恵: 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安とのちの育児ストレスとの関係—第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究—。発達心理学研究, 9, 56-65, 1998。
- 2) 武井祐子, 寺崎正治, 門田昌子: 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌, 16(2), 221-227, 2007。
- 3) 武井祐子, 寺崎正治, 高尾堅司, 門田昌子: 養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究。川崎医療福祉学会誌, 18(1), 219-225, 2008。
- 4) 武井祐子, 久松ひろ枝, 門田昌子, 岩藤百香: My ふれあい Book。未刊行, 2017。
- 5) Takei Y, Terasaki M, Kadota M, Okutomi Y and Takeuchi I: Effects of baby massage based on child's temperament characteristics on child-rearing. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, 22(1), 33-45, 2016。
- 6) 武井祐子, 門田昌子, 奥富庸一, 竹内いつ子, 岡野維新, 岩藤百香, 寺崎正治: 気質特徴に適合したベビーマッサージプログラムが養育者の育児不安および育児自己効力感に及ぼす効果の検討。小児保健研究, 80(1), 38-45, 2021。
- 7) 武井祐子, 門田昌子, 竹内いつ子, 岩藤百香, 岡野維新, 寺崎正治: 子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージが養育者の育児上の気づきと認識に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌, 31(1), 73-79, 2021。
- 8) 前橋明, 石井浩子: 低年齢児～幼児とのふれあいあそび—手遊び&親子体操—。初版, ひかりのくに, 大阪, 2005。

- 9) 奥富庸一, 國峯巧巳: A. S. E. プログラムの要素を取り入れた親子ふれあいプログラムの予備的実践とその効果. 幼児体育学研究, 2(1), 47-57, 2009.
- 10) 武井祐子, 奥富庸一, 門田昌子, 竹内いつ子, 岡野維新, 岩藤百香, おかい: 気質いろいろ親子ふれあい遊び. 未刊行, 2019.
- 11) 武井祐子, 門田昌子, 奥富庸一, 竹内いつ子, 岡野維新, 岩藤百香, 寺崎正治: 子どもの気質特徴のフィードバックと親子ふれあい遊び体験が養育者に与える効果. 川崎医療福祉大学附属心理・教育相談室年報, 13, 1-13, 2018.
- 12) 武井祐子, 門田昌子, 奥富庸一, 竹内いつ子, 岩藤百香, 岡野維新, 寺崎正治: 気質特徴に適合した親子ふれあい遊びが養育者の育児認識, 育児不安および育児自己効力感に及ぼす効果. 川崎医療福祉学会誌, 29(2), 279-292, 2020.
- 13) 森野美央, 倉田伸, 前田桂子, 古谷嘉一郎: コロナ禍の親子広場における子育て・子育て支援の現状と課題—オンライン保育での手遊びと, 領域「表現」・「言葉」で示されている価値との関連を手がかりに—. 長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 20, 125-135, 2021.
- 14) 瀬々倉玉奈, 清水文: オンラインによる子ども・子育て支援の可能性—コロナ禍2年間における活動の実践報告—. 京都女子大学教職支援センター研究紀要, 4, 135-142, 2022.
- 15) 武井祐子, 門田昌子, 奥富庸一, 竹内いつ子, 岡野維新, 岩藤百香, 寺崎正治: オンライン形式での気質特徴に適合した親子ふれあい遊び体験が養育者の育児不安及び育児自己効力感に及ぼす効果. 日本心理学会第85回大会, 2021.
- 16) 武井祐子, 寺崎正治, 門田昌子: 幼児気質質問紙作成の試み. パーソナリティ研究, 16(1), 80-91, 2007.
- 17) 手島聖子, 原口雅治: 乳幼児健康診査を通じた育児支援—育児ストレス尺度の開発—. 福岡県立大学看護学部紀要, 15-27, 2003.
- 18) 井元友貴, 寺崎正治, 武井祐子: 育児期の母親における育児不安についての研究—子どもの気質及び育児における自己効力感との関係—. 日本発達心理学会第18回大会発表論文集, 749, 2007.
- 19) 武井祐子, 上村昌子, 奥富庸一, 竹内いつ子, 岩藤百香, 岡野維新, 寺崎正治: 幼児期の子どもの気質タイプと養育者の育児不安および育児自己効力感. 日本心理学会第84回大会発表論文集, 169, 2020, DOI [https://doi.org/10.4992/pacjpa.84.0\\_PO-020](https://doi.org/10.4992/pacjpa.84.0_PO-020)

(2023年6月13日受理)



## Effects of a Parent-Child Interactional Exercise Program Considering Children's Temperament on Parents' Daily-Life Childcare Anxiety and Parenting Self-Efficacy: Comparing In-Person, Online, and Revised Online Programs

Yuko TAKEI, Masako KADOTA, Yoichi OKUTOMI, Itsuko TAKEUCHI,  
Momoka IWADO, Ishin OKANO and Masaharu TERASAKI

(Accepted Jun. 13, 2023)

**Key words** : temperament, parent-child interaction exercise program, childcare anxiety,  
parenting self-efficacy, online

### Abstract

This study investigated the effects of a parent-child interactional exercise program that took the children's temperament on parents' daily-life childcare anxiety and parenting self-efficacy into consideration. The study compared the efficacy of an in-person program, an online program, and a revised online program. Parents (N=10: in-person program group, N=14: online program group, N=10: revised online program group) responded to self-reported questionnaires before and after participating in the programs. Results indicated that parents' vague childcare anxiety decreased regardless of the program. In contrast, only parents in the in-person group reduced their childcare anxieties, including evasive feelings for children. Moreover, the daily-life parenting self-efficacy in the in-person group increased. The study concluded that all types of parent-child interactional exercise programs considering children's temperament positively affected the daily lives of mothers caring for children. However, future studies must examine the program's content in more detail to identify the best remote programs for increasing daily-life parenting self-efficacy, similar to the in-person program.

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [takei@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:takei@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.1, 2023 9 – 17)